HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	5. まとめ
Author(s)	松本, 秀人
Description	第I部: 本論: 観光と図書館の融合について. 第5章
Relation	観光と図書館の融合 = The fusion of tourism and libraries
Citation	CATS 叢書, 5, 90-97
Issue Date	2010-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43221
Rights	© 2010 松本秀人
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS05_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第5章　まとめ

1　本研究によって示されたこと

本研究では、観光と図書館が持っている課題について「両者の融合が、双方の課題解決に役立つのではないか」という仮説をもとに、図書館の特性が観光と関連性があることをまず示したうえで、図書館の資料・サービス・施設や、図書館の地域との関連やインターネットの発達との関連など様々な点から、観光と図書館が融合しうる可能性を具体的に考察した。その結果、融合の可能性があること、またそれにより双方および地域に様々なメリットがもたらされる可能性があることを示した。さらに、これらの考察をふまえ、図書館を媒介役とする「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」を試案として示した。

これまでにも図書館によっては、観光者に対応したり、観光ポスターの展示を行ったり、観光情報の問い合わせに応えるなどが行われていた。また最近では、観光に関する取り組みを積極的に行う図書館もみられるようになってきた。しかし図書館界全体で総体的にみれば「観光」への配慮はあまりなかったといってよい。

一方、観光においても「図書館」はこれまでほとんど考慮されることのない要素であった。ここで示された可能性が実践で活かされるためには、図書館が観光を意識し、観光が図書館を意識し、さらには地域が両者を融合させようと意識することが必要である。本研究がそのきっかけをもたらすことを期待するものである。

麦屋(2009, p.235)は「観光まちづくりを1軒の家にたとえて考えてみる。玄関・廊下・台所・応接間・寝室はどこになるだろうか。玄関は空港、駅、高速道路のインターチェンジや道の駅、駐車場、廊下は玄関から観光資源や施設までの道路、散策路、遊歩道、台所は田畑や海、川、そしてレストランだろう。応接間を考えると、特定の文化財や名所旧跡、温泉など観光関連施設だけが観光客を迎え入れる応接間ではない」と述べ、家を比喩とした観光まちづくりのイメージを示している。この比喩を借りるならば、図書館はまさにまちの書斎であろう。しかし、「観光と図書館の融合」という試みはそれだけにとどまらず、「寝室には愛読書があり、応接間には画集があり、リビングには趣味のハウツー本がある」というような「家のあちこちに本が置いてある状態」に喩えるほうがより適当だと思われる。図書館の持つ情報や機能やノウハウが観光と融合するためには、図書館が地域の書斎として存在するだけではなく、地域の様々な場所において、あるいは観光の様々な場面において、図書館が活躍することが望ましいのである。

2　融合によってもたらされる「新たな価値」について

第1章で、「“融合”とはお互いの要素を連携・活用・協働しあうことによって、新たな価値が創造されること」と述べた。では、観光と図書館の融合がどのような「新たな価値」をもたらしうるかについて、改めて指摘してみよう。

まず、図書館にとっては、「新たな利用者の出現」という点があげられる。これまで多くの図書館では観光者を利用者として特に意識してこなかったので、融合によって図書館に新たな利用者が出現することになる。また、図書館を新たに「観光者と地域との交流の場」としてとらえることもあげられる。従来から図書館は交流の場であったが、地域外から来訪する観光者と地域住民との交流の場としての意識が新たに生まれるのである。

次に、観光にとっては、「図書館も観光資源である」という認識をもたらす。博物館や動物園などはすでに観光資源として認知されているが、これまで図書館が観光資源であるというとらえ方はほとんどされてこなかったので、新たな観光資源が生まれることになる。また図書館を、地域情報や観光情報を提供したり、観光と様々に連携しうる機関としてとらえる見方をもたらす。これはすなわち図書館が新たな「観光のインフラストラクチャー」として出現することを意味する。

さらに地域へは、「図書館は、“まちづくり”という営為の記録を次世代に残す仕組み」という認識をもたらす。持続的な営為としてまちづくりをとらえた時、記録の保存は重要な事項であるが、ここで図書館が社会的な記憶装置であり、地域文化の可視化装置であり、情報の濾過装置であることを意識すれば、「まちづくり」の記録を図書館が担うことについて地域として共通の理解ができる。そして、図書館が観光と融合することによって、たんに記録を保存するだけではなく、観光者（地域外の人々）にも、まちづくりの有り様に関心を持ってもらったり、地域文化との関連を理解してもらうことができ、そこから様々な反応を得たり、交流につなげることができるのである。

また、図書館が観光を意識した活動を行うことによって、地域住民にも新たな周知効果をもたらす可能性があるという点も強調したい。地域住民が地元の観光案内所に行く機会はあまりないだろうが、図書館は日常的に利用される施設である。そうした場所で地域文化や地域の観光資源をアピールしたり情報を提供することによって、地域住民も日常生活のなかで地元の文化や観光情報を知る機会がもたらされる。このように「地域住民に対して、地域の観光情報を周知する」というユニークな役割を図書館に与えることができる。

石森（2008）は、地域住民が主役となり、地域住民が誇りを持つことのできる地域資源を持続可能な形で訪問者（観光者）に提供することにより、地域住民と訪問者がともに感動や幸せを共有で

きるような「新しい観光の創造」が、日本が観光立国を推進する際の最重要課題であると主張している。これまでの考察をふまえると、観光と図書館の融合はこうした「新しい観光の創造」にも、貢献しうる可能性を持っていると考えられるのである。

3　融合にあたって留意すべき点について

観光と図書館が融合する際に留意すべき点は、第3章でもそれぞれ指摘してきたが、最後に総論として特に留意すべき点を述べる。

これまで述べてきた「観光と図書館の融合」というテーマは、視点を変えると、図書館にとっては「地域住民以外へのサービスをどう考えるか」という問題に帰着する。図書館は条例や財源でみれば地域住民へのサービスが基本であるが、公共施設という点でみれば、地域住民であるとないとに関わらず、誰でも平等に利用することができる。しかし、例えば「資料の貸出」についてみても、「地域住民以外の利用者登録を認めるか」、「地域住民以外へ資料の貸出を認めるか」などは図書館によって対応が様々である。図書館が提供するサービスの中には、地域住民と地域外住民に対して同じように対応できる部分と対応しにくいものが存在しているのである。

同様に「観光と図書館の融合」についても、「図書館が観光に寄与することによって、地域のためになる」という考え方もあれば「そこまで図書館がする必要はない」という考え方もあるだろう。さらに「現実問題として、予算や人員の問題から対応が難しい」という事情などもあって、取り組み方は様々になると思われる。本研究は、「すべての図書館が観光との融合を意識せよ」とか「観光振興には図書館が不可欠」などと主張するものではないが、図書館と観光と地域が共に活性化しうる方策のひとつとして、「観光と図書館の融合」について具体的な実践が進むことを期待している。その際にどのようなスタンスをとるかは、地域における図書館の位置づけや地域全体の特性などと合わせて、各自治体それぞれが検討しなければならないが、そこでは、地域住民も当事者意識を持って意見を表明したり議論に参加することが必要である。これはまさに、これからの観光が「地域主導型」になるべき方向性と同じである。

4　今後の課題について

「観光と図書館の融合」をテーマとする先行研究がないため、本研究では、今後の研究の出発点となるべく、図書館の諸要素からみた融合の可能性をできるだけ網羅的に考察することを主眼とした。従って今後の課題としては、融合の実践にあたって検討すべき点を、より詳しく考察するこ

とが必要である。その際にはそれぞれの地域によって、観光や図書館などをめぐる状況が異なるため、一般化できる部分と個別に判断すべき部分があると思われる。また参考事例としてあげたものについても、より詳しい調査や分析も必要である。

さらに関連するテーマとして、①専門図書館や大学図書館など公共図書館以外の図書館と観光との融合の可能性、②海外における観光と図書館の融合事例、③図書や読書体験と観光との関係、などの研究も必要だと考えている。

また「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」についても、社会学などの知見をふまえて理論的な裏付けを精緻化し、現場へのフィールドワークも行うなどにより、さらに考察を行う必要がある。

【参考文献】

油川ほか（2009）新しい視点の観光戦略，学文社，200p.

バーゾール＝ウィリアム，根本彰ほか訳（1996）電子図書館の神話，頸草書房，254p.

ボワイエ＝マルク，成沢広幸訳（2006）観光のラビリンス，法政大学出版局，410p.

中央教育審議会（2008）新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について，56p.

第17回京都図書館大会実行委員会（2009）第17回京都図書館大会記録集（CD-ROM）

藤崎慎一（2002）第1章第3節　観光まちづくりは人づくりから，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.58-77

福永智子（2005）Ｖ－３　情報と利用者，根本彰ほか編，図書館情報学の地平，日本図書館協会，pp.315-320

羽田耕治（2008）地域振興と観光ビジネス，ジェイティービー能力開発，278p.

長谷政弘（2003）第1章　新しい観光振興に何が求められるか，長谷政弘編著，新しい観光振興，同文舘出版，pp.5-24

廣瀬誠（1990）図書館と郷土資料，桂書房，253p.

堀川紀年（2007）日本を変える観光力，昭和堂，185p.

井口貢（2002）第3章　観光文化立国の実現に向けて，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.27-42

石田順一（2004）観光立国マーケティングのコツ，JDC出版，214p.

石森秀三（2008）観光立国時代における観光創造，石森秀三編著，大交流時代における観光創造，北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院，pp.1-20
伊東達也（2008）第1章　読書の重要性と図書館，大串夏身編著，読書と図書館，青弓社，pp.16-39
金武創（2002）第9章　地酒文化と観光振興，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.127-140
桂英史（2001）人間交際術，平凡社，212p.
川口直木（2003）第四章　全国の都市観光に向けた取り組み，都市観光でまちづくり編集委員会編，都市観光でまちづくり，学芸出版社，pp.95-98
古池嘉和（2002）第6章　「駅」が街になる，井口貢編著，観光文化の振興と地域社会，ミネルヴァ書房，pp.81-90
古池嘉和（2007）観光地の賞味期限，春風社，211p.
国立国会図書館（2007）地域資料に関する調査研究（図書館調査研究リポートNo.9），201p.
米良信男（2008）現代観光のダイナミズム，同文舘出版，210p.
これからの図書館の在り方検討協力者会議（2006）これからの図書館像，93p.
窪田亜矢（2009）10章　観光の視点から考えるまちづくりの課題，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.268-283
薬袋秀樹（2005）公共図書館行政，三田図書館・情報学会編，図書館・情報学研究入門，頸草書房，pp.142-145
薬袋秀樹（2008）地域を支えるこれからの図書館像(インタビュー)，*開発こうほう*，20，pp.1-10
望月照彦（2002）第1章第2節　人々が喜んで集まり交流するまちづくり，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.33-58
文部科学省（2009）社会教育調査（平成20年度中間報告）
森　茜（2000）4章　図書館ボランティア，図書館ボランティア研究会編，図書館ボランティア，丸善，pp.103-152
麦屋弥生（2009）7章　持続可能な観光まちづくりの担い手たち，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.227-241
中谷哲弥（2005）第1章第3節　地域文化を見つめ直す，奈良県立大学地域創造研究会編，地域創造への招待，晃洋書房，pp.21-28
根本彰（2004）続・情報基盤としての図書館，頸草書房，199p.

根本彰（2002）情報基盤としての図書館，頸草書房，255p.
根本彰（1999）第1章　地域資料サービスの意義，三多摩郷土資料研究会編，地域資料入門，日本図書館協会，pp.1-54
根本彰（2008）日本の知識情報管理はなぜ貧困か，別冊環15，藤原書店，pp.59-70
日本観光協会編（2008）観光実務ハンドブック，丸善，942p.
日本図書館協会町村図書館活動推進委員会（2001）図書館による町村ルネサンスLプラン21，日本図書館協会，62p.
日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編（2007）図書館情報学用語辞典，丸善，第3版，286p.
日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編（1979）図書館ハンドブック，日本図書館協会，補訂4版，548p.
日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編（2005）図書館ハンドブック，日本図書館協会，第6版，652p.
日本図書館協会，日本の図書館(各年版)
日本図書館協会，図書館年鑑(各年版)
日本図書館協会図書館雑誌編集委員会，図書館雑誌(各号)，日本図書館協会
日本図書館協会編（1997）公共図書館の特別コレクション所蔵調査報告書，日本図書館協会，127p.
西村幸夫（2009）1章　観光まちづくりとは何か，西村幸雄編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.9-28
西村幸夫（2002）第1章第1節　まちの個性を活かした観光まちづくり，観光まちづくり研究会編集，新たな観光まちづくりの挑戦，ぎょうせい，pp.16-32
額賀信（2008）観光統計からみえてきた地域観光戦略，日刊工業新聞社，175p.
小川徹・奥泉和久・小黒浩司（2006）戦後の出発から現代まで，日本図書館協会，276p.
大串夏身（2008）課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，261p.
大串夏身（2002）これからの図書館，青弓社，196p.
大串夏身（2007）最新の技術と図書館サービス，青弓社，256p.
岡野英伸（2004）「観光学」論考，アートデイズ，252p.
岡崎篤行・梅宮路子（2009）2章　まちづくりから観光へ，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.54-63

大塚由良美（2008）第10章　地域文化と図書館，大串夏身編著，課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，pp.208-228
阪田蓉子（2006）情報サービス論，教育史料出版会，補訂2版，246p.
三多摩郷土資料研究会編（1999）地域資料入門，日本図書館協会，287p.
佐藤一子（2003）序章　生涯学習における「公共空間」の形成，佐藤一子編，生涯学習がつくる公共空間，柏書房，pp.10-26
社会経済生産性本部（2007）レジャー白書 2007，社会経済生産性本部，150p.
敷田麻実・末永聡（2003）地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究，*日本沿岸域学会論文集*，15，pp.25-36
島川崇（2002）観光につける薬，同友館，183p.
塩見昇（2006）図書館サービス論，教育史料出版会，補訂2版，244p.
塩見昇（1991）生涯学習と図書館，青木書店，227p.
塩見昇（2008）UNIT19　まちづくりと図書館，塩見昇編著，図書館概論，日本図書館協会，新訂版，pp.107-110
菅原峻（1999）図書館の明日をひらく，晶文社，274p.
旅の販促研究所（2009）旅人の本音，彩流社，205p.
高山正也（2008）日本における文書の保存と管理，別冊環15，藤原書店，pp.42-58
竹内比呂也・豊田高広・平野雅彦（2007）図書館はまちの真ん中，頸草書房，180p.
図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会（2005）地域の情報ハブとしての図書館，76p.
内田州昭（2004）第9章　観光文化と生涯学習，北川宗忠編著，観光文化論，ミネルヴァ書房，pp.201-228
植松貞夫（1998）総論，*SD*，別冊(31)，pp.5-11
梅川智也（2009）3章　観光からまちづくりへ，西村幸夫編著，観光まちづくり，学芸出版社，pp.97-112
渡部幹雄（2006）地域と図書館，慧文社，235p.
山崎博樹・蛭田廣一（2008）第11章　地域情報と図書館，大串夏身編著，課題解決型サービスの創造と展開，青弓社，pp.230-261
柳与志夫（2009）知識の経営と図書館，頸草書房，254p.
安村克己（2006）観光まちづくりの力学，学文社，166p.

吉田右子（2008b）コミュニティにおける公共図書館の位置づけ，*言語*，37(9)，pp.46-53
吉田右子（2008a）住民による図書館支援の可能性，日本図書館情報学会研究委員会編，変革の時代の公共図書館，勉誠出版，pp.135-152